「箸ぞうくん」開発秘話

〈目次〉

【お箸】 1
「箸ぞうくん」の始まりはこんなことからでした。 2
「箸ぞうくん」を生み出す 3
『箸ぞうくんL型、鶴首型』完成 6
「箸ぞうくんL型、鶴首型」を売り出す 7
惨敗、そして分岐点 9
再出発 11
勝負 15
その後 18

【お箸】

日ごろ何気なく使っている「箸」。一説によると飛鳥時代に「神の器」として伝来したと言われています。その後、聖徳太子のころには貴族の間で使われ、時代とともに庶民に一般化したと言われています。以来、箸は日本の食材、調理方法、食器などとお互いに影響しあい発展し、慣れ親しんできました。いわゆる食文化です。

それが病気やけが、マヒなどで「箸」が使えなくなったらどうでしょう。スプーンやフォークだけしか使えない、また食べさせてもらうなど著しい影響が出ます。

麺類に限らず、お刺身やお漬物など箸でなければなじまない食べ物があります。

もし皆様が突然「箸」が使えなくなったらと想像してください。

これより書かれたものはこのような障害がある方々が使える「箸ぞうくん」という名の「箸」ができるまでの話です。

「箸ぞうくん」の始まりはこんなことからでした。

１９９４年１０月１日、父親の鋳造工場の２代目として働いていた現在の（有）ウインド社長の中川が、工場の集塵機についているミキサーに右手を巻き込まれました。先生方の手術のおかげで何とか指はつながりましたが動きません。腱移植もしましたが僅かに動くようになっただけです。右手でしたので何をするにも不自由です。箸を左手で使わなければなりません。季節も冬になって行きますので鍋料理の回数も増えます。困ったことに中川はこれが大好きなのです。

最初は左手で箸を使って食べるのですが、やはり使い慣れていない為徐々に左手が疲れてくるのです。空腹の時は疲れてきてもそれを感じません。でもある程度食べて空腹感が収まってくると疲労感に襲われます。まだ満腹にはなっていないのに左手が疲れてしまって食べられないのです。こんな経験は初めてでしたので病院に入院している麻痺患者さん方に話してみると「結構食事には労力が必要で疲れてしまう」とのことでした。

「箸ぞうくん」を生み出す①

結局1年間に3回の手術をして指が何とか動くようにと願ったのですが叶いませんでした。しかし、不幸なことばかりではありませんでした。リハビリのY先生と整形外科のM先生との出会いでした。特にY先生とは毎日のリハビリをしながら自助具、福祉用品、医学的な知識など色々なことを教えていただきました。

しばらくして日常生活の中でもっとも使う道具であり、且つ不自由な手で使うのが難しい「箸」について、中川は暖めていた基本的なアイデアをテーマに議論するようになりました。そしてある日のリハビリで家で作って使っていた自分専用の「箸ぞうくん」の原型となった「箸」を見ていただきました。そしてそれをたたき台にまた「ああだこうだ」と議論を重ねていきました（もちろんリハビリ中にです）。議論を重ねればそれにつれて改造していくのは当然です。リハビリ後、家に帰って早速改造の日々でした。

「箸ぞうくん」を生み出す②

「箸ぞうくん1号機」は使用者であり製作者の中川の専用として作られました。具体的には「箸」（このときはまだ市販のもの）にグリップを付けて手の中で安定をさせ、ガイド板で「箸先」をクロスしないように動きを規制し、ニギニギと指を動かすだけで簡単に挟めるようにしてありました。（基本的に現在の箸ぞうくんと同じコンセプトです）。毎日この箸で食事です。これなら手が疲れなくて満腹になるまで食事できます。あらためて食べる事の大切さを学びました。

そして「自分が上手く使えれば他の方々はどうだろうか？」試して見たくなるのはY先生も中川も同様です。早速2号機を作り、病院内の患者さんに使っていただこうという事になりました。その患者さんは数年前に脳溢血で右半身麻痺になり、少し回復した後同じ病気で左半身麻痺になられた方で麻痺の残る右手でスプーンを使って食事されていました。

「箸ぞうくん」を生み出す③

食事のメニューが「うどん」の日に合わせてテストをしました。結果は見事に麻痺の残る手で「うどん」が食べられたのです。そして患者さんは食事しながら突然泣き出したのです。訳を聴きますと「スプーンで食べるのが悔しくて情けなくて。それが何年かぶりに自分の手で箸で挟みながら食べられた」この言葉に中川も雷で打たれたように心に強く刻まれました。ここまで他人からこんなにも感激されて、しかも涙を流されたことはいまだかつて経験無かったのです。

そして「箸」にこれだけの「パワー」があることに気付かせてくれました。病院内だけのテスト（一定時間内にまめを摘んで隣の皿に移す）に留まらず、養護学校や養護施設などで色々な症状の方々に協力していただきテストを続けました。もちろんその間にも改造、実験の毎日でした。障害のある方が10人いたら10通りの箸が必要です。一つの箸で出来るだけ多くの方々に使っていただけるように設計することが必要でした。

『箸ぞうくんL型、鶴首型』完成

太いコルク製のグリップを自在に曲げられるようにして手の中でのフィットするようにし、（休息姿位、寝ている時の力の入っていない指の状態で安定するように）後は「ニギニギ」と指を動かすだけで難しい箸先が合うように設計しました。一膳一膳ずつ手作りでしたので価格も高く５５００円もしました。病院から生まれた商品らしくデザインはまったく考慮されておらず、機能性のみを追及した設計となりました。しかし、その使いよさ、性能は現在の商品と比べても遜色なく今でも時々オーダーが入ります（今は生産中止です）。

当時の福祉用品の業界、特に自助具の「箸」の市場はまったくと言ってほどなく、「世の中障害があればスプーン、フォークで食事を」というのが信じられていました。「障害があっても自助具の箸を使って」なんてことは多くの方々は考えてもいませんでした。

「箸ぞうくんL型、鶴首型」を売り出す①

さて、商品は出来たけれどこれをどうやって世の中に出すか?そこで業界紙に取り上げていただこうと考えました。早速業界紙の「S社」の電話番号を調べて会っていただけるようにお願いをしました。当日、サンプル品を持ってS社にお邪魔し、編集長に説明しました。好印象を持っていただいたのかまもなく写真入りで紹介記事が掲載されました。やっと船出した瞬間です。研究を開始してから2年たっていました。

商品説明用のパンフレットも始めて作りました。しかし、記事にはなったもののそれですぐに売れるはずもありません。まして「自助具の箸」など見たことも無いという時代でしたのでなおさらです。しかし事態は東京で進んでいました。東京の「自助具のスプーン」メーカーS社（現在F社）の社長がその記事を御覧になっていたのです。電話を頂き早速にサンプルをもって新幹線に乗りました。

「箸ぞうくんL型、鶴首型」を売り出す②

Ｓ社の社長とは東京駅の「銀の鈴」でお会いいたしました。何もかもが初めてのことです。一生懸命に話を致しました。社長もさぞお困りになった事でしょう。お会いしてから２時間以上「自助具の箸」の話ばかりなのですから。そして横浜の介護実習普及センターまで行って自助具の制作現場を見学させていただき、そこでも係りの方と社長と3人で「自助具箸」の話をしました。

Ｓ社の社長も「箸ぞうくん」の性能には理解を示していただいたようでしたが何分世の中にないはじめての商品ですので慎重です。ちょうど「作業療法士の全国大会」が東京の八王子であり、Ｓ社が出展することになっていました。社長はそこに「わずかなスペースだけれど一緒に展示しないか」と誘っていただきました。１９９６年の5月の事でした。これが「箸ぞうくん」が始めて「商品」となるきっかけになりました。

惨敗、そして分岐点①

展示会では「箸ぞうくん」の性能は今までの病院でのテストがバックにありますのでOTの先生方のご質問にも答えることが出来、先生方も手にとって使っていただき驚かれたり、感心されたりして納得いただきました。それをご覧になってS社の社長も性能的には認めていただきましたが商品性、市場性は別です。そこで今でもお世話になっている大手のF社の方を呼んでこられ、ご覧いただきました。

そしてその方が仰られたのは「デザインが良くない。いかにも手作りで商品性が低い。価格が高すぎる。このままでは売り物と認められない。いくら性能が良くても当社は扱わない」との厳しいお言葉でした。

そこでS社の社長が果たして「自助具の箸」の市場あるのか無いのか、その規模や求められている商品性などを質問され、「市場規模は始めての分野なのでわからない。有るの

か無いのかもわからない。でも時々お客様から求められることはある」との答えを頂きました。

惨敗、そして分岐点②

中川はわかっていたのです。どうすればいいのかを。今まで先送りにしてきたことを指摘されたのです。つまり商品性を高める→デザイン良く設計し金型を作る、価格を安くする→金型を作り量産する。展示会も終わり、帰りの新幹線の中で今後の展開を考えました。進むには指摘された欠点を克服するより手が無い事は明らかです。しかし金型を作るにはかなりの資金が必要です。

現に受け入れられる市場があって商品が成功するとの可能性があれば賭けられます。しかし、全く市場が無くてこれから自力で切開いていかなければならない世の中で初めての商品に資金をかけるかどうかというところで今まで躊躇していたのです。わかっていたからいつまでも一個一個手作りのままだったのです。それを性能が良いことで言い訳をしい

たのです。自分をごまかしていたのです。冷静に考えればリスクが大きすぎてギャンブルです。まして家業があります。趣味で研究するのはここまでと「箸ぞうくん」の事はあきらめました。

再出発①

ここで一人の高校生U君が登場します。彼は全国的にも知られた奈良の有名な私立の進学校の2年生でしたが交通事故のため頚椎損傷で指が動かなくスプーンで食事をしていました。当時高校の目の前のマンションの一室を車椅子で動けるように床をフラットに改装してお姉さんと二人で下宿していました。彼のお母さんとあるボランティア団体の会合で知り合い、私が「障害者用の箸」を研究していることを知ってお母さんは息子さんの事情をお話になり最後にこうおっしゃられたのです。

「息子もいずれ社会に出て自立していかなければならないでしょう。そのために基本的な日常生活を営めるように自分で出来る事を増やしていかないと。先ず食べる事、簡単な

食事が作れるようになると一人で下宿できるようになるので2年後に控えた入試で大学を選べる幅が広がり、それによって自分のなりたいと思っている夢もかなえられる。ぜひとも協力して欲しい」

再出発②

初めて会ったU君は大人びていました。なぜなら事故のために病院で2年間を過ごし、その間高校は休学していましたので高校2年の出会った当時もう19歳でした。電動車椅子を器用に操り、かまわれるのが嫌なのでしょう、できることは出来るだけ自分でしているのがわかりました。早速普段どおり食事をしてもらいましたが、両手とも親指は動かせず、スプーンを親指と人差し指の付け根に差し込んで持ち食べていました。

ただ、手首を外に曲げる事が出来、それにつれてわずかに親指以外の指が手のひらの方向に閉じることがリハビリの訓練によって可能となっていました。また、肘、肩も充分に動きました。この手首を外転する事によって生じるわずかな指の動きで「箸を閉じたり開

いたりが出来ないか」可能性はこれしかありません。そのためにはこのわずかな指の動きをロスすることなく箸に伝えなければなりません。「どのように対応した箸を作れば良いのか」いろんな考えが頭の中を駆け巡りました。

再出発③

先ず箸を手の中で安定させて落とさないようにする。親指の付け根に箸を閉じる時の動きを支える「ツッパリ」の役目をさせる。手首を外転したときに動く指の最大ストロークを探り、その位置にグリップをつける。その時の力で動かせる力を色々なサイズのバネで試行錯誤する等々。後日、「箸ぞうくんL型」をベースに小改造したものを使って食事してもらいました。ちょうど夏休み前の暑い夕方でした。

その日の晩御飯のメニューに「そうめん」加えていただくようにお願いしていました。U君の手に「箸ぞうくん」装着して手首を動かすと見事に箸が閉じるのです。お母さんもお姉さんも中川もびっくりです。箸が動くのを確認して実際にそうめんを摘むと「摘める

のです」。挟んだまま出汁に漬け、口まで運びます。その場にいた皆さんの歓声、U君の照れた笑い、中川もほんとに心のそこからの嬉しさに「こんな喜びもあるもんだ」と初めての経験にびっくりしていました

再出発④

当時の日本では頸椎損傷で箸が使えなくなった方が「ソーメン」を食べるなど稀有のことだったでしょう。パーキンソン、リュウマチ、麻痺などいろいろな病気や高齢で箸が使えなくなった方々が再び箸を使って食事するなど常識外のことだったのです。

早速U君の食事風景をビデオに撮ってお世話になっている病院の整形外科のドクターにもご覧頂きました。しかし、あまりにもスムーズに使っているのでドクター曰く「どこが悪いねん？」　この言葉こそ基本性能の高さだと自信を深めました。それからはその病院にもご協力いただいてテストを積み重ねることになりました。入院患者さんにお豆の入ったお皿を2枚置き、30秒間にお互いのお皿に何粒摘まんで動かせるかとか、摘まむもの

の大きさを変えてうまく使えるかとかテスト方法も試行錯誤で先のドクターやリハビリの先生と相談しながら進めました。

勝負①

試行錯誤していると患者さんの中でも「頑張っていこう」という姿勢の方はどんどん上手になり、そうでない方は芳しくないという同じ箸でも結果が違い、いかに道具が優れていてもメンタル面が重要だと知らされました。

ということは、機能性だけでなく「持ちたい、使いたい」という気持ちを起こすような商品性が重要と考えました。このようにどんどん考えや、経験が深くなるにしたがって、「この商品をつくり出して、世の中の常識を覆してぽっかりと空いた穴を埋めないと。そのためには本腰を入れて開発、生産、販売をしないとと思い至り、事業としてスタートしました。まさに商品もこれから作り、販売先もこれから開拓、何の有縁地縁もない、資金もないと「ないない尽くし」で、ただ「世の中に絶対必要としている方がいる」との思い

だけのスタートでした。

勝負②

さて、商品開発が始まりました。プラスチック金型をオーダーしなければいけません。その為には図面を書かなくてはなりません。手の中にすっぽりと収めるようにと「箸ぞうくん」は3次曲面の複雑な形状です。持ちやすさのためには作りやすいが持ちにくい形にはできません。しかし昔気質の職人さんおかげで完成することが出来ました。後は販売です。前述のS社社長のお教えで1996年「国際福祉機器展」に出展することになりました。全く今まで知らない世界で、ご来場の皆様にどういう風にアピールしたらよいのかもわからず、テストした時の生のVTRを会場で流して一生懸命に話をしました。それが功を奏したのです。本当に箸の使えない様々な症状の患者さんが、箸を使っているところを映し出しているのです。会場に来られたドクターやリハビリの先生方はもうくぎ付けです。わずか1コマの最小のブースでしたが黒山の人だかりになりました。

勝負③

展示会が終わってから、その反響とは裏腹に販売の方は全く伸びず「どうしたものか」と自信を無くしかけていたときです。展示会で知り合った北海道のT社から「札幌で開催されるリハビリ学会」に展示しないかと連絡がありました。

北大で開催されたのですが、そこで展示しているとあるドクターが前を通られたのです。そして「箸ぞうくん」がおいてあるのを見て「今年の東京の国際福祉機器展で一番インパクトのあったものが目の前にある！」と大声をあげられて、たくさんの方々にも勧められたのです。北大の展示会も大盛況だったのですが、その先生のお言葉が一番のうれしさで、今日までの原動力になっています。

その後①

それから5年、ようやくリハビリの先生方や介護の関係者から認知されるようになりましたが、でもそこそこの販売数が見込めるようになったのはもう5年ほどかかったでしょうか。1998年初めての特許も取れ、一般的にも介護、ケアなどの言葉が語られ始めていた2000年ころ、突然「日本デザイン振興協会」から電話を頂戴しました。グッドデザイン賞（Gマーク）の応募へのお誘いです。そしてその年のグッドデザイン賞を頂戴しました。授賞式は、旧赤坂プリンスで芸能人の結婚式で有名な大広間で執り行われ、美術の授業は得意であったが全くデザインなど勉強したことがない中川は、ただおどおどするばかり。その大広間は本物のデザイナーで大混雑でした。

その後②

大勢のデザイナーの前で頂戴した表彰状や記念品の中に、審査員からの評価として「価

格、性能、そして商品の誠実さ」が授賞のポイントと書かれていました。この言葉は、今でも新商品を作る上で基本中の基本となっているところです。翌年、それを踏まえ新しいコンセプトの「箸ノ助」で2年連続でGマークを頂戴しました。天然木を使い、食卓においても違和感なく日常の箸のようにたずみ且つ使いやすいというものです。この箸を作るために、縁があってインドネシアに木工工場を作りました。今ではスプーンフォークやパートナーなど木製品の生産拠点となっています。

その後③

その後、簡単に使えるだけでなく、使ってみようと思っていただけるデザイン、機能、価格などいろいろな障害のレベルや使う場所・状況に応じた沢山の新商品も発売しました。そして今ではバリアフリー、ユニバーサルデザインの次の目標を目指すデザインもスタートしています。障害を負ってしまった方々とお話しすると多くの方は悔しい思いをされています。この気持ちを少しでも慰められる商品デザインを始めました。「心を寄せるデザイン」です。うまく指が動かなくても簡単に使えるのは当たり前、使って心が癒され

るようにおいしく、楽しく食事してほしいという思いからの商品つくりです。

（終）

箸ぞうさん

京都六角

WIND DESIGN

ウィンド風

有限会社ウインド

2020.09